

「第1回中学校英語に関する基本調査 報告書」を読んで

西岡 祐*

2008年7月から2009年2月にかけて、Benesse 教育研究開発センターにより「第1回中学校英語に関する基本調査【教員調査・生徒調査】」が行われた。その調査の報告書の内容を分析してみることにする。報告書の中では、様々な問題が浮かび上がってきているが、その中で特に1) 中学入学前の英語学習について、2) 中学において英語という科目が生徒から非常に人気のない科目であり、また生徒の授業の理解度が低いという問題について、3) 英語の教師と生徒の関係について、を中心に考えていきたいと思う。

今回の調査では公立中学校の教師と中学2年生の生徒の両方に、中学入学以前の英語学習についての質問がなされている。2011年の4月から、全国の公立小学校において、5・6年生に対して外国語活動（英語）が週1時間必修科目として行われることになった。今回の調査はそれ以前に行われた。しかし91.4%の生徒が、小学校の時、学校で英語の授業や活動があったと回答している。つまり現在行われている外国語活動の授業とはまったく同じではないにしろ、総合的な学習の授業の時間などを利用して、ほとんどの生徒が何らかの形で小学校で英語の勉強をしてきた、ということである。生徒たちは小学校で受けてきた英語の授業をどのように評価しているだろうか。

小学校での英語の授業や活動に関する質問の項目で、「楽しかった」に

*専修大学文学部兼任講師

対して「とてもそう」が23.4%、「まあそう」が47.3%で、合計して約70%の生徒が「楽しかった」と回答している。「あまりそうでない」(20.8%)、「まったくそうでない」(8.2%)という否定的な回答も29.0%あったが、全体的にはおおむね好意的な感想を持っているようである。また「内容が簡単だった」に対しても77.2%が「そう思う」と回答している。ところが「外国や英語に興味をもった」に対しては「とてもそう」(12.5%)、「まあそう」(29.3%)、「あまりそうでない」(39.7%)、「まったくそうでない」(17.0%)であった。一番多かった回答は「あまりそうでない」(39.7%)で、肯定的な回答(41.8%)よりも否定的な回答(56.7%)が多かった。つまり、小学校で学んだ授業は楽しかったが、半数以上の生徒がそれによって外国の文化や英語に興味をもつことはなかった、と回答したことになる。これでは、小学校に英語教育を導入する目的の根幹が達成されなくなってしまわないだろうか。2011年度以降必修化された外国語活動に対しても、生徒たちが同様な反応を示し続けるとしたら、これは重要な問題である。何らかの対策が講じられなければならないであろう。

今回の調査によれば、39.2%の生徒が中学校に入学する前に、学校の授業以外(学習塾や英会話教室など)で英語や英会話の勉強をしていた(していなかった、59.2%)と回答している。「中学校に入学する前、英語は好きでしたか」に対しては、「好き」、「どちらかといえば好き」を合わせると45.0%、「どちらかといえば嫌い」、「嫌い」を合わせると42.9%だった。「好き」、「どちらかといえば好き」と答えた方が少し多かったが、「どちらかといえば嫌い」、「嫌い」も、ほぼ同程度の42.9%だったことに注目する必要がある。特に中学校に入って本格的に英語の勉強をし始める前に既に40%以上の生徒が英語が嫌いだと思っているのは重大な問題である。同様に「中学校に入学する前、中学校で英語を学ぶことが楽しみでしたか」に対しては、「とても楽しみだった」(9.2%)、「まあ楽しみだった」(32.7%)、「あまり楽しみではなかった」(34.3%)、「まったく楽しみでなかった」

(18.7%)で、53.0%、すなわち半数以上の生徒が「楽しみでなかった」と回答しており、「楽しみだった」(41.9%)を上回っている。そして「中学校に入学する前の英語の勉強は、中学校で役に立っていると思いますか」に対しては、「とても役に立っている」(11.4%)、「まあ役に立っている」(38.0%)の合計が49.4%、「あまり役に立っていない」(28.5%)、「まったく役に立っていない」(11.8%)を合わせると40.3%だった。「役に立っている」という回答のほうが多いものの、両者とも40%台で、評価が二分する形となっている。また「とても役に立っている」(11.4%)と「まったく役に立っていない」(11.8%)がほぼ同じ数値である。以上のことをまとめると、4割以上の生徒が中学に入学する前に英語が嫌いだと感じており、半数以上が中学で英語を勉強することに期待感を感じることができず、約4割の生徒が、中学入学以前に勉強した英語は中学校では役に立っていないと思っている。これらのことから判断すれば、生徒たちの評価が二分していることは確かであるが、全体としては、生徒たちが中学校入学以前に小学校や学校以外で行われてきた英語の学習は、あまり有意義なものであったとは言えないようである。

今回の調査では、中学校の生徒だけでなく、英語の教員に対しても、小学校で行われている英語教育(活動)に関しての質問がされている。そして報告書の中で、中学の教員の小学校英語に対する認知度、関心の低さが指摘されている。確かに調査の結果から見れば、中学教員の小学校英語に対する認知度だけでなく、期待感も低い。報告書に指摘されているように、「英語を聞くことに慣れる」や「外国の異文化に対する興味が高まる」という点に対しては高い期待感が示されているが「コミュニケーション能力が高まる」、「英語で話す力が高まる」、「子どもが英語好きになる」、「英語の語彙が増える」ことなどに関してはそれほど期待しておらず、逆に「あまりそうは思わない」という回答が、いずれも30%を超えている。また「将来的に英語を話せる日本人が増える」に対しては68.7%が「あまりそう思

わない」、「まったくそう思わない」と回答し、「とてもそう思う」、「まあそう思う」は、わずか24.3%に過ぎない。「中学校での英語学習がスムーズになる」に対しても「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」が51%と過半数を超え、「とてもそう思う」、「まあそう思う」は42.1%にとどまっている。「英語の発音の指導がやりやすくなる」に対しても同様に「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」が50.9%に対して、「とてもそう思う」、「まあそう思う」の42.5%を上回っている。そして「中学校での英語の授業の導入ややり方を小学校に合わせて変えている」に対しては、「あまり当てはまらない」(22.2%)、「まったく当てはまらない」(57.7%)と、ほぼ8割の教員が否定的な回答をしている。以上のことを包括すれば、中学校の英語の教師たちは、小学校での英語に関して一定の理解と期待感を示しているが、それ自体子どもの英語の能力を本質的に高めるものではなく、まして小学校で生徒たちが英語の勉強をしてきているからといって、それを頼りにしたり、中学での英語の授業を今までと変えようとするつもりはない、ということであろう。基本調査報告書の中では英語教育の小中連携の重要性が何度となく強調されている。しかしこのことは裏を返せば、小中連携は実際にはほとんど実現していないということではないだろうか。今回の基本調査の結果を見る限り、中学校の英語教員は英語教育の小学校との連携はほとんど意識していないようである。また生徒たちも、約4割の生徒が小学生の時に勉強した英語は中学校では役に立っていないと感じ、「中学校に入学する前、中学校で英語を学ぶことが楽しみでしたか」という質問に対して、半数以上の生徒が「楽しみでなかった」と回答しているように、小学校時代の英語の学習が英語教育の小中連携に貢献しているとは感じていないようである。

今回の基本調査が行われた2008～2009年の時点において、日本の公立中学校の英語教育は大きな問題をかかえていた、と言わねばならない。報告書の中で指摘されている問題点をまとめると、

- 1) 中学校において英語は国語とともに、もっとも人気のない科目である。
- 2) 英語が人気のない科目である原因は、生徒たちが英語の授業の内容をわからないからである¹⁾。約6割の生徒が授業の内容をあまり良くわかっていない。他の教科と比べても英語の授業の理解度は低い。
- 3) 中学2年の段階で、6割以上の生徒が英語を苦手と感じている。

である。これらの中で2)の英語の授業の理解度の低さは特に深刻な問題で、調査の結果によれば、授業の内容を半分くらいしかわかっていないという生徒が32.8%と、一番多い²⁾。Benesse教育研究開発センター主任研究員、木村治生氏の分析によれば、授業の内容を「『ほとんどわかっていない』と『30%くらい(わかっている)』の合計が27.0%と、他の教科に比べて高い。授業についていけない生徒が、4人に1人程度いるという結果である。」³⁾以上の結果として、一部の習熟度の高い生徒を除き、大多数の生徒が中学校の3年間で学習する英語の基本的な能力を習得できずに高校に進学してしまう。

なぜこのようなことになってしまうのか。上智大学外国語学部教授、吉田研作氏は次のように分析している。

どうしてこのような結果が生まれるのか。その原因の一つは、現行の学習指導要領では、中学校では、英語の時間は週3時間になっているが、その内容は、4技能すべてを含んだ実践的コミュニケーション能力の育成となっている。とはいえ、英語の使用場面とことばの働きで明示されているように、オーラル・コミュニケーションに重点が置かれていることが分かる。そのため、文字コミュニケーション能力の育成に必要な文法等、言語形式の修得がおろそかになりがちで、高校でより重視される読み書きの基本作

りがなかなかできない、という現象が生まれる。つまり、週3時間では、総合的に英語の4技能をすべて教える、ということが非常に難しい、という現状が生まれる。そのため、中学と高校の間にギャップが生まれ、高校の中には、1年目の授業の内容を中学の復習に費やさなければならないところがあるのである⁴⁾。

確かに、「ゆとりの教育」の導入により、公立中学校の英語の時間数が週4時間から3時間に減らされたことが、昨今の中学生の英語の学力の大幅な低下の主要な原因であることは否定できない。しかし、はたして授業時間数の削減だけが、英語の学力低下の原因であろうか。もしそうだとすれば、授業時間数が週3時間から、ふたたび週4時間に増やされたことにより、すべての問題が解決するはずである。しかし現実には、そのようにうまく事が運ぶとは思えない節がある。中学生たちが英語の授業がわからないという原因は、授業のやり方自体、つまりその方法論にもあるのではないだろうか。

英文和訳、文法の学習を中心とした、かつての伝統的な日本の英語教育では、役に立つ英語を習得することができないとして、近年英語教育の改革が進められてきた。文部科学省は、「英語が使える日本人」を育成することを英語教育の目的として、机の上で英語の読み書きを勉強することではなく、英語による実践的コミュニケーション能力の育成を中心とする教育改革を推進してきた。文部科学省の新学習指導要領によれば、中学校の「外国語科」の教育目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とされているが、現在の中学校の英語の教科書の内容は、特に話すことによるコミュニケーション能力の育成を重視したものになっている。

このような、役に立つ英語の習得を目標として、英語を話すことによるコミュニケーション能力の育成を重視した英語教育の改革は、はたしてうまく行っているのだろうか。今回の中学校英語に関する基本調査の結果を見る限り、答えはNoである。既に述べたように、中学生たちは英語の授業の内容がよく理解できず、約6割の生徒が英語を苦手と感じ、英語は中学生にとって非常に人気のない科目になってしまっている。また昨今の日本の青少年の英語の学力低下の主要な原因が、「英語が使える日本人」の育成を目標とした文部科学省の英語教育改革の失敗であることも明らかである。中学生たちは、英語を話すことによるコミュニケーションを重視した英語教育を受けているが、コミュニケーションの土台となるべき英語の基礎学力を習得する機会を十分に与えられていないのである。英語によるコミュニケーションを行うためには、その基盤となる英語の基礎的な学力が必要であるが、現在日本の学校で行われている英語教育は、その基礎学力の育成ができていないのである。中学生たちは、中学校の3年間で学び取らなければならない英語の基礎学力を習得できないため、それを基盤としたコミュニケーション能力も当然身につけることができずに高校に進学してしまう。そして高校の英語の授業でも、土台となる基本的能力がないので、その上に高校で学ぶことを積み上げることができずに高校を卒業してしまう。生徒たちは中学、高校の6年間の英語の授業で結局何も身につけることができずに終わってしまうのである。

かつての日本の英語教育のもとでは、日本人は英語を読むことはできるが、話すことができない、と言われていた。しかし、そのような英語教育では、「英語が使える日本人」を育成できないとして、伝統的な日本の英語教育の手法は否定され、役に立つ英語を身につけるための英語教育の改革が推進されてきた。しかし、現在の日本の大学生の英語の学力低下を見れば、この英語教育の改革がまったく効果を上げていないことは一目瞭然である。かつての日本人は、英語を話すことはできないが、少なくとも読

むことは多少なりとも出来た。しかし今日の日本の若者たちは、英語を話すことはもちろん、読むこと、書くこともできず、結局何もできなくなってしまったのである。現在日本の中学では、文章を読むことよりも音声によるコミュニケーションを重視した英語教育が行われている。それならば、少なくとも英語の正しい発音ぐらいは身につけていてもおかしくないはずである。しかし昨今の日本の大学生に英語を教えてみれば、そのような期待はまったくの幻想であることが即座にわかる。彼らは英語の文章を音読するのが大の苦手であることは言うまでもないが、個々の単語さえも正しい発音ができないのである。これでは、英語教育の改革ではなく、英語教育の崩壊である。現在の日本の青少年たちは、いわば英語教育の改革の失敗の犠牲者なのである。

日本の英語教育の改革の破綻が現在の中学校においてどのような形で現れているかを、今回の基本調査の結果から読み解いていくことにする。中学校の英語の教員に対する調査の中で、「一単元で見たときに、次のような活動を生徒はどのくらいしていますか。」という質問に対して、「読む活動」は「よくしている」が70.4%、「ときどきしている」が26.1%、「聞く活動」は「よくしている」が40.3%、「ときどきしている」が50.6%、「書く活動」は「よくしている」が36.1%、「ときどきしている」が51.2%、「話す活動」は「よくしている」が36.0%、「ときどきしている」が49.0%だった。つまり英語を「読む」、「聞く」、「書く」、「話す」4技能の中で、「読む活動」を授業の中で「よくしている」教員が70.4%と、他の3技能に比べて圧倒的に多いことがわかる。

次に「あなたは、授業において、次のようなこと（指導方法）をどのくらい行いますか」という質問に対して、「よく行う」という回答が多かった順に並べれば、

- 1) 音読 (87%)
- 2) 発音練習 (75.1%)

- 3) 文法の説明 (71.1%)
- 4) 教科書本文のリスニング (62.9%)
- 5) 文法の練習問題 (62.5%)
- 6) ペアワーク (61.7%)
- 7) 前回の授業の復習 (60.8%)
- 8) キーセンテンスの暗唱と運用 (49.2%)
- 9) Q&A (質疑応答) による教科書本文の内容読解 (46.4%)
- 10) 教科書本文の和訳 (43.4%)
- 11) 英語による教科書本文の口頭導入(オーラルイントロダクション)
(31.1%)
- 12) 発音と綴りとの関連づけ (29.9%)
- 13) グループワーク (26.3%)
- 14) ゲーム (24.3%)
- 15) 英作文 (18.9%)
- 16) 教師による small talk (英語での簡単な雑談) (17.2%)
- 17) 英語の歌を歌う (15.4%)
- 18) ディクテーション (10.3%)
- 19) 手紙や日記などを書く活動 (5.8%)
- 20) スピーチ・プレゼンテーション (5.1%)

となっている。以上の結果によれば、授業の中でもっとも重視されているのは教科書の音読、発音練習やリスニングといった英語の発音や音声に関する活動であり、その次に重視されているのが文法の説明や練習問題であることがわかる。

この授業の指導方法に関する調査の結果の中で注目すべき点は、教科書本文の和訳の順位が低いということである。全20項目の質問の中で教科書の和訳を「よく行う」(43.4%)の順位は10位であり、「よく行う」と「と

きどき行う」(29.6%)を合わせた順位は12位である。かつての日本の英語教育において、まず第一に行われたのは、英語を日本語に訳すことだった。しかし、そのような英文和訳を中心とした手法では、役に立つ英語が習得できないとして、実践的コミュニケーション能力の育成を重視する英語教育の改革が推進された。この授業の指導方法に関する質問の回答を見ても、教科書の和訳よりも音読、発音練習やペアワーク、キーセンテンスの暗唱と運用、Q&A(質疑応答)による教科書本文の内容理解などのオーラル・コミュニケーション能力の育成を目的とした活動が重視され、昨今の英語教育の改革の趣旨を反映する内容となっている。しかし、かつての英文和訳を中心とした英語教育の手法が否定されたとはいうものの、既に述べたように、今回の調査によれば、英語を読む、聞く、書く、話す活動の中で授業中にもっともよく行われているのは、読むことである。英語を読む活動の中で、教科書本文の和訳よりも音読、発音練習やペアワーク、キーセンテンスの暗唱と運用、Q&Aによる内容理解を重視した授業を行って、はたして生徒たちは教科書本文の内容を十分に理解できているのであろうか。

調査の結果によれば、授業において教科書本文の和訳を「よく行う」は43.4%で、半数に満たない数値である。そして「ときどき行う」が29.6%であるが、「ときどき行う」ということは、裏を返せば「いつも必ず行うわけではない」ということになる。さらに驚くことは、「あまり行わない」が22.3%、「まったく行わない」が4.4%で、両者を合わせると26.7%になるという点である。以上の結果を要約すれば、調査を行った中学校の英語の教員の中で、授業中に教科書本文の和訳を十分に行ってくれるのは10人中4人程度で、それ以外の教員は重要な文やむずかしい文だけ和訳したり、あるいは日本語の訳は生徒にまかせて、授業中にはあまり、あるいはまったく行わない、ということであろう。近年の英語教育の改革が実施される前に英文和訳を中心とした英語教育を受けた者にとっては、この調査結果

は驚くべきものであろう。

このような、教科書本文の和訳を軽視した授業形式で、生徒たちが授業の内容を十分に理解できれば問題はないであろう。しかし今回の調査の結果によれば、中学2年生の約6割が英語の授業の内容をあまり良く理解しておらず、4人に1人が授業についていけない状態である。この根本的な原因は、教師たちが教科書本文の和訳を十分にやってくれないため、生徒たちは教科書の中の英文が日本語でどういう意味になるかという、もっとも基本的なことがわかっていないからなのではないだろうか。あるいは、調査の結果によると、多くの生徒たちが「文法が難しい」と感じているということであるが、生徒たちは教科書本文の文法事項が理解できないため、文の構造自体がわからず、その結果、英文がどういう意味になるかもわからない、という事態も考えられる。教師たちに言わせれば、「重要なのは英文を日本語に訳すことではなく、発音練習やコミュニケーション能力を身につける訓練をすることである」とか「教科書本文の和訳は生徒たちが自分でやればいい。第一これぐらいの英文は意味がわかって当たり前」とか「教科書の英文をいちいち訳している時間がない」ということかもしれない。しかし教科書本文の意味が理解できなければ、いくら音読、発音練習やペアワーク、キーセンテンスの暗唱と運用、Q&Aによる教科書本文の内容理解などのオーラル・コミュニケーションの活動を行っても効果がないのは自明の理である。文部科学省は、コミュニケーション能力を育成する外国語教育の方針の一環として、中学校や高校の英語においては、教師が英語で授業を行うことを推奨している。しかし教師が授業の中で英語による small talk や教科書本文のオーラルイントロダクションを行うことと、教科書本文の和訳を行って、生徒に教科書の内容をよく理解させることと、はたしてどちらが重要であろうか。教師が教科書本文の和訳を十分に行わないため、生徒たちは授業の内容をよく理解できず、発音練習やコミュニケーション活動を行っても、結局は無駄な努力に終わってしまう。

そして「テストで思うような点数が取れない」、「文法が難しい」などの理由で6割以上の生徒が英語を苦手と感じ、その結果英語は国語とともに、もっとも人気のない科目となってしまう。これが今回の基本調査で明らかになった、公立中学校の英語教育の実態ではなからうか。

基本調査における学校以外での英語の勉強についての質問に対して、43.1%の生徒が「学習塾で英語を習っている」と回答している。また英語が得意・苦手・好き・好きではないによって区別した結果によれば、「学習塾で英語を習っている」のは英語が得意で好きな生徒は61.1%、得意だが好きではない生徒は55.2%、苦手だが好きな生徒は45.1%、苦手が好きではない生徒は32.9%だった。また45.4%の生徒が学習塾で、あるいは家庭教師に英語を習ったり、英会話を習うなどの、学校以外での英語の勉強を「していない」と回答している。この中で、英語が得意で好きな生徒で、学校以外での英語の勉強を「していない」のは26.0%、英語が得意だが好きではない生徒で「していない」のが30.0%、英語が苦手だが好きな生徒で「していない」のが41.8%、苦手が好きではない生徒が57.3%となっている。また調査を行った中学生の中で「英会話を習っている」と回答した生徒は4.6%と、学習塾に行っている生徒に較べれば圧倒的に少ないが、それでも英語が得意で好きな生徒は10.3%、英語が得意だが好きではない生徒は7.0%と、英語が苦手な生徒よりも高い割合になっている。つまり英語が得意・好きな生徒の方が苦手・好きではない生徒よりも、学習塾など、学校以外で英語を勉強している割合が高く、逆に学校以外で英語の勉強をしていない比率は、英語が得意・好きな生徒は低く、苦手・好きではない生徒は高い、という結果が出ている。また Benesse 教育研究開発センター研究員、初海真理子氏の分析によれば、中学入学前の学校以外での英語学習についても同じ傾向が見られ、(中学入学前に)「学校外英語学習を『していた』生徒は英語が『好き』という比率が62・2%と、『していなかった』生徒の34.0%を大きく上回った」⁵⁾ということである。そ

して「学校外での英語学習の経験は・・・(中略)・・・英語を『好き』という気持ちや、英語を『得意』と感じる意識と関連がある」⁶⁾と指摘し、中学生に関しては「全体の約6割にあたる『苦手』かつ『嫌い』な生徒は、学校外英語学習時間が短いことがわかった。一方で少なくとも『好き』または『得意』という気持ちがあれば、学校外でもある程度の英語学習を行っているようである」⁷⁾と結論づけている。

しかし、初海氏の説は、少なくとも中学生の学校以外での英語学習、とりわけ学習塾での学習には当てはまらないように思える。初海氏の見解によれば、英語が「好き」、または「得意」という気持ちがあるから学習塾に行って英語の学習を行っている、ということになるが、真相はその逆ではないだろうか。つまり英語が好き、または得意だから学習塾に行って英語を勉強するのではなく、学習塾に行って塾の先生に教えてもらわないと学校の英語の授業の内容がよく理解できず、英語が好き・得意という気持ちになれないのではないだろうか。英語が好き・得意という気持ちになるための第一条件として、授業の内容を理解できなければならない。学習塾に行かずに学校の英語の授業を受けているだけでは、授業がよくわからない、ということではなかろうか。調査における生徒の回答によれば、英語に対して苦手意識やつまずきを感じる最大の原因は「英語のテストで思うような点が取れない」と「文法が難しい」である。学習塾に行って塾の先生の指導を受けなければ、英語のテストで良い点を取ったり、文法事項を理解することができない、という側面があることが推測される。基本調査報告書によれば、英語が「得意・好き」な生徒は21.2%、「得意・好きではない」生徒が16.3%、「苦手・好き」が4.1%、「苦手・好きではない」が57.7%だった⁸⁾。この中で、今さらながら「苦手・好きではない」生徒の多さに驚かざるを得ないが、「得意・好き」な生徒と「得意・好きではない」生徒を合わせると37.5%となり、「学習塾で英語を習っている」割合(43.1%)に近い数値となる。学習塾に行って英語の勉強をすることが、

英語が得意であると言えるようになるための重要な要素であるという悲しむべき実態、言い換えれば昨今の英語教育の学習塾に対する依存度の高さが暗示されているように思える。

学習塾に行く子供の数が増えた要因の一つが、「ゆとりの教育」の導入といわれている。「ゆとりの教育」の方針により、各教科の授業時間数が減らされ、むずかしい箇所は教科書から削除され、授業で教えられなくなった。学校の授業だけを受けていたのでは十分な学力がつかず、また入学試験で点が取れないという理由で、以前にも増して学校の授業が終わった後で学習塾に通う子供の数が増えた。学習塾での勉強の目的は学校の授業の補習と入試対策の勉強であるが、実際には一部の成績優秀な子供たちを除けば、学校の授業の補習が学習塾での勉強のかなり重要な部分を占めているように思える。学習塾に行っても勉強しなければ学校の授業についていけず、試験で思うような点が取れないという現象は、中学校の英語に限ったことではなく、小学校や中学校の他の科目にもあてはまることであろう。文部科学省は、「ゆとりの教育」が子供たちの学力の低下を引き起こし、結果的に失敗だったことを認め、ふたたび授業時間数を増やすように方針を転換した。これにより子供たちの学力の向上は、ある程度は期待できるとしても、少なくとも学習塾に対する依存率の高さは、そう簡単に解決できる問題とは思えない。学習塾への依存は、日本の社会においては不幸にして長年続いてきた、深く根付いた現象であり、その根底には学校内のテストや入学試験で良い点を取ることが一番大事なことだという、点数至上主義がある。このような点数至上主義の考えに基づく学習塾への依存が、文部科学省が教育方針を転換したからといって、そう簡単に解消するとは思えないのである。公立中学校の英語に関しても、週4時間から3時間に減らされた授業時間数が再び週4時間に増やされることになった。しかし中学生の英語の学力低下は、既に述べたように、授業時間数が減らされたことだけが原因でなく、英語教育の改革による、実践的コミュニケーション

ン能力の育成を重視した、授業のやり方自体にも問題がある。したがって授業時間数が再び週4時間に増やされたことによって、生徒たちの学力が向上し、学習塾に行かなくても学校の英語の授業が良くわかるようになってくれれば、それに越したことはない。しかし実際には、そううまく事が運んでくれる可能性は低いように思える。

学習塾依存の最大の問題点は、子供たちの自律した学習習慣の形成が阻まれる、ということである。学校が終わって家に帰ってから塾に行く。みんなが行くから私も行かなくちゃ、と思う。塾に行けば学校の授業でわからなかったこと、学校で教えてもらわなかったことも、塾の先生がすべて教えてくれる。子供たちは「学校よりも塾の授業の方がおもしろく、役に立つ」と思うようになる。塾が終わって家に帰ると、かなり遅い時刻になり、その後で家で自分の勉強をする時間など、あまりない。塾に行くのと学校の宿題をやるので精一杯で、学校の授業の予習、復習などの勉強を自発的にする習慣が身に付かない。勉強はすべて塾まかせになってしまい、塾以外の勉強はしなくなってしまう。今回の基本調査の中で、中学校の教員たちに「英語に対して苦手意識やつまずきを感じている生徒は、どのようなことが原因だと思いますか」という質問をしたところ、「英語に限らず、学習習慣が付いていない」という項目に対して、「とてもあてはまる」という回答が68.0%、「まああてはまる」が27.3%（両者を合わせると95.3%）、「英語に限らず、学習自体への意欲が低い」という項目に対しては「とてもあてはまる」が61.0%、「まああてはまる」が30.7%（両者を合わせると91.7%）だった。これらの二つの項目に対する「とても（まあ）あてはまる」という回答がいずれも90%を超える非常に高い数値だった。中学校の英語の教師の目から見ても、英語に限らず生徒たちに学習の習慣がついていないこと、学習への意欲が低いということが大きな問題だ、という調査の結果が出た⁹⁾。学習の習慣が身につけていないことに関しては、基本的には生徒たちの家庭内の問題であり、親のしつけの悪さが大きな原

因であろう。基本調査報告書によれば、近年「家庭での生活が乱れている生徒が増加している」¹⁰⁾ということである。子供の勉強はすべて塾にまかせる、という親の姿勢が、子供たちの家庭内での自律的な学習習慣の形成の大きな妨げになっていることは、否定しがたい事実である。子供たちが学校が終わった後に学習塾に行って勉強する、という世界的に見ても異常な現象を見直すことは、現在の日本の教育問題を改善する重要な一歩になるのではないだろうか。

生徒たちの学習習慣の欠如、学習意欲の低さとともに今回の調査の結果で気になったことは、生徒たちに「どんな英語の授業を受けたいですか」という質問をしたところ、「入試に役立つ授業」という回答が38.9%で一番多く、「英語が好きになる授業」が31.3%と、二番目に多かった。「英語が好きになる授業」という回答が二番目に多かったことは、裏を返せば「今受けている授業では英語が好きになれない」ということであり、先に述べた、英語が好きになれない生徒が多いという事実を裏付けているようである。それはさておき、ここで問題となるのは「入試に役立つ授業」という回答が一番多く、40%台に近い数値だったのに対して、それ以外の回答、「高等学校やそれ以降の英語学習に役立つ授業」が6.4%、「言語や文化に対する理解が深まる授業」が3.6%、「積極的なコミュニケーション能力が身につく授業」が13.8%と、極端に少なかったことである。本調査は全国の公立校に通う中学2年生2,967名に対して行われたものであるが、中学2年の段階ですでに「英語の授業で一番大切なことは、入試で役に立つことをやってくれることである」と考えているということは、少々驚きである。また調査の結果によれば、入試で点を取るため以外の目的、たとえば高校やそれ以降に英語を学習するための基礎学力を身につけるためとか、言語や文化に対する理解を深めるため英語を勉強しようという意識が今日の中学生にはほとんどない、ということが判明した。中学校の英語教育の目的は、高校やそれ以降に英語を学ぶために必要となる英語の基本的能力

を習得させることであるが、肝心の教育を受ける立場の中学生たちがこのことをまったく理解していない、ということは重大な問題である。また「英語を勉強しているのは、どうしてですか」という質問に対して一番多かった回答が「英語のテストでいい点を取りたいから」であることからわかるように、中学生にとって一番大切なことは、入試だけでなく、学校内の試験でも良い点を取ることである。

これも中学校の英語に限ったことではないが、勉強するのは試験で点を取るためだけで、それ以外の勉強はしない、というのは現在の日本に蔓延した風潮である。試験シーズンになると、普段はまったく勉強しない高校生や大学生が電車の中で必死に勉強する。また大学の教員をしているものなら誰もが、学生たちが勉強するのは試験の時だけ、ということを感じているはずである。つまり小学生から大学生に至るまで、日本で今日学校教育を受けている者たちは、試験で良い点を取りさえすればいいんだと考え、それ以外の目的で普段から勉強する習慣がまったく身につけていないということである。学習塾というものは本来学校内のテストや入学試験で良い点を取るための教育を行う所である。小学生の時から学習塾に行くのが習慣化していると、どうしても、勉強するのはテストで良い点を取るためだ、という考え方が身につけてしまう。親からも、テストで良い点を取って良い成績をもらいなさい、とうるさく言われる。塾の先生だけでなく、学校の先生からも（すべての先生がそうだということはないだろうが）テストで点を取ることがあたたかも一番大切なことだ、というような教育を受ける。昨今、日本の青少年が、一昔前に較べると勉学に対する意欲が格段に低くなってしまったが、その背景には彼らが、勉強するのは試験で良い点を取るためである、という教育観のもとで育てられてきた、という事実があるように思える。つまり彼らは、何のために勉強するのか、という根本的な問題を理解していないのである。

今日の勉強しない日本の若者たちは、いわば点数至上主義、偏差値至上

主義に基づく教育システムの申し子なのである。しかし中学生の段階から既に、勉強は試験で点数を取るためだけにすれば良いという考え方に支配され、日頃から着実に勉強する習慣がまったく身につけていない、というようなことでは、本当の学力がつかないということは明白である。中学校の英語に関しても、今回の基本調査によれば6割以上の生徒が抱えている英語に対する苦手意識を払拭させ、英語の学力低下の問題を解消するためには、まず生徒たちに、勉強は試験で点を取るためにするものである、という考え方を改めさせ、日々勉強する習慣をつけることの大切さを理解させることが必要となるのではないだろうか。そのためには点数至上主義に支配された教師たちや親たちの教育観を転換させることも必要であろう。

学習塾が一般化する前に育った世代にとっては、子供たちが学校が終わった後に学習塾に行く姿が少々異常に思えるのと同様に、今回の基本調査で明らかになった中学生と中学校の教員との関係についても、一昔前に学校教育を受けた者にとっては驚きを隠せないものがある。基本調査の中で、中学生に対して「英語の学習でわからないことがあったときに、あなたは どうしますか」という質問が、複数回答の形式でされている。一番多かったのは「友だちに聞く」(61.1%)で、以下「辞書(電子辞書を含む)で調べる」(44.2%)、「家族に聞く」(40.2%)、「学校の先生に聞く」(38.4%)、「塾の教師や家庭教師の先生に聞く」(38.3%)、「参考書や問題集で調べる」(28.0%)、「とくに何もしない」(12.0%)の順だった。これらの回答は、二つの点において驚くべきものである。第一点は「友だちに聞く」という回答が一番多かったことで、もう一点は「学校の先生に聞く」という回答の順位が低かったということである。

上記の質問に対して「友だちに聞く」という回答が一番多かったということは、まったく予想外の結果だったと言って良いであろう。ただ一番多かったというだけでなく、すべての選択肢の中でこの回答だけが60%台に達し、他の回答よりも圧倒的に高い数値だった。英語が得意・苦手、好き

・好きではない生徒別の調査結果においても、英語が得意で好きな生徒を除き、すべて「友だちに聞く」という回答だけが60%以上で一番多かった。英語が得意で好きな生徒に関しても、一番多かったのは「辞書（電子辞書を含む）で調べる」（60.3%）で、「友だちに聞く」（59.4%）は数値上は二位だった。しかし両者の数値にはほとんど差がなく、実質的には二つの回答がほぼ同率ですべての回答の中で一番多かった、とすることができるであろう。英語の勉強に関してわからないことがあったときに「友だちに聞く」中学生が圧倒的に多いという調査結果が出た最大の原因は、英語を教えてくれる学校の先生には聞きにくい、あるいは聞きたくないということであろう。大学の講義においてならば、小学校、中学校、高校に較べて教員と学生の関係が疎遠になり、受講者の多い講義もあるので、講義でわからなかったことがあった時は、同じ講義を取っている友だちに聞くということはよくあることである。しかし中学校の英語に関しては、担当教員と生徒が週3回授業で顔を合わすし、またわからないことがあれば職員室に行って質問することも気軽にできるはずである。しかし調査を行った中学生たちは、本来質問をするべき授業を担当している先生に聞くよりも、友だちに聞くことを優先するのである。「類は友を呼ぶ」と言うように、友だち同士は同じような学力である可能性が高い。したがって、わからない所を友だちに聞いても、友だちの方も同じようにわかっていないこともあるだろう。また友だちから教えてもらったことが、本当に正しい内容であるという保証はまったくない。友だちから間違ったことを教えられて、それをそのまま信じてしまうということもありえる。授業でわからないことを友だちに聞いて、それで済ましてしまうというのは非常に危険を伴うやり方である。しかし中学生の間では、その危険な手段が一番多く行われているのである。

それにしても、英語の学習でわからないことがあったときに「学校の先生に聞く」と答えた生徒の少なさはまったくの驚きである。一番多かった

「友だちに聞く」という回答が全体で60%を超えていた(61.1%)のに対し、「学校の先生に聞く」という回答は30%台(38.4%)にとどまり、3番目に多かった「家族に聞く」(40.2%)に次ぐ、4位の回答であった。5位の「塾の先生や家庭教師の先生に聞く」(38.3%)の数値は、全体の調査ではかろうじて上回ったものの、その差はわずか0.1%であり、両者は実質的には同じ順位とみなすべきであろう。また英語が得意・苦手、好き・好きではない生徒別の回答では、「塾の先生や家庭教師の先生に聞く」は、英語が得意で好きな生徒は54.3%、英語が得意だが好きではない生徒が46.1%、「学校の先生に聞く」は英語が得意で好きな生徒は51.1%、英語が得意だが好きではない生徒が40.3%と、いずれも「塾の先生や家庭教師の先生に聞く」が「学校の先生に聞く」を上回っている。つまり英語がすきか否かにかかわらず、英語が得意な生徒に関しては、学校の先生に聞くよりも塾の先生や家庭教師に聞く生徒の方が多い、ということである。しかも既に述べたように¹¹⁾、学習塾で勉強しているのは英語が苦手な生徒よりも得意な生徒の方が圧倒的に多い。このことを考慮に入れれば、全体の調査は学習塾に行っていない生徒を含めた数値であるが、こと学習塾で英語を勉強している生徒に限って言えば、学習塾の先生に聞く生徒の方が、学校の先生に聞く生徒よりも多い、と判断しなくてはならない。つまり中学生たちは「英語の授業でわからないことがあっても、授業をしてくれる学校の先生に聞くよりは、友だちや家族や塾の先生に聞いた方がましだ」と考えているということである。この中学生たちの学校の英語の先生に対する不信感は重大な問題である。

この学校の英語の先生に対する不信感は、英語が苦手好きな科目でない生徒の間でもっとも顕著であり、英語に対する苦手意識を増大し、英語の学習意欲を失わせる大きな原因であるように思える。英語が苦手好きなではない生徒で、英語がわからないことがあった時に「学校の先生に聞く」と回答したのは、わずかに31.9%で、「友だちに聞く」と回答した生徒

(61.1%)の約半分しかいない。それにしても、なぜ中学生たちは英語が得意、苦手にかかわらず、わからないことを学校の先生に聞きたがらないのであろう。これは英語に限った現象であろうか。この中学生たちの英語の先生への不信感の原因は、今回の基本調査の結果からは読み解くことはできないが、少なくとも調査の他の質問の結果からも、この不信感を裏付けることができる。「英語を勉強しているのは、どうしてですか」という質問に対して、「とてもあてはまる」という回答が一番多かった理由は「英語のテストでいい点を取りたいから」(37.9%)、二番目に多かったのが「できるだけよい高校や大学に入りたいから」(35.2%)で、先に述べた点数至上主義、偏差値至上主義の考えが中学生たちを支配していることを改めて裏付ける形になっている。これに対して「英語の先生が好きだから」という理由に「とてもあてはまる」と回答したのは4.8%にとどまり、全12項目中10番目の回答だった。同様に「英語の先生がはげましてくれるから」に対して「とてもあてはまる」と回答したのは、わずか3.0%で、全12項目中最下位より一位上の11位だった。逆に「英語の先生が好きだから」に対して「あまりあてはまらない」は43.2%、「まったくあてはまらない」は31.9%（両者合わせて75.1%）、「英語の先生がはげましてくれるから」に対して「あまりあてはまらない」は46.6%、「まったくあてはまらない」が34.5%（両者合わせて81.1%）だった。これら2項目に対しては「あてはまる」に対して「あてはまらない」の回答が圧倒的に多いという結果が出た。

信州大学准教授、酒井英樹氏の分析によれば「生徒の英語の学習意欲は、英語学習への興味関心に関するもの、受験や成績に関するもの、そして、教員に関するものにわけられる」¹²⁾ということである。調査の結果によれば、中学生が英語を勉強する理由は、「英語のテストでいい点を取りたいから」とか「できるだけよい高校や大学に入りたいから」という「受験や成績に関するもの」であり、「英語が好きだから」とか「英語の勉強がお

もしろいから」という「英語学習への興味関心に関するもの」¹³⁾や「英語の先生が好きだから」というような「教員に関するもの」ではない、ということが明確になった。特に教員との関係に関する要因は、生徒の英語の学習意欲を高めるところか、逆に生徒の教師への不信感が英語の学習意欲をそぎ、英語が苦手、嫌いになる原因の一つになっているように思える。このことは「英語の先生が好きだから」と「英語の先生がはげましてくれるから」の二項目に対して、英語が好きな生徒、とりわけ英語が苦手だが好きな生徒の方が、英語が好きではない生徒に較べて「とてもあてはまる」、「まああてはまる」という回答を格段に多くしている、という調査結果によっても裏付けられている。ただ残念なことに、英語が「好き」な生徒(25.3%)は「好きではない」生徒(74.0%)に較べて圧倒的に少なく、特に英語の教員と比較的良好な関係にあると思われる英語が「苦手だが好き」な生徒は、全体の4.1%に過ぎない。その英語が「苦手だが好き」な生徒でも「英語の先生が好きだから」、「英語の先生がはげましてくれるから」の項目に対して「とてもあてはまる」、「まああてはまる」よりも「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の回答のほうが多く、両項目に対する「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」という回答の合計はいずれも50%を超えている。

中学校の英語の先生は生徒たちから信頼されていないし好かれてもいない、また英語の先生と生徒たちの人間関係が、生徒たちの英語の学習意欲を高めるところか、逆に英語が嫌いになる一因になっているということ、中学校の英語の先生たちはどのように考えているのだろうか。基本調査の中で、英語の教員に「英語科の教師として、何が重要だと思いますか。(特に重要だと思うものを3つまで選択)」という質問をしている。一番多かった回答は「教科指導力」(90.0%)で、年齢別調査では、教員の年齢が高くなればなるほど、この回答を選んだ確率が高くなった¹⁴⁾。二番目に多かったのが「授業を運営する力」(74.8%)で、この回答に関しても年齢

の低い教員よりも高い教員の方が回答率が高かった¹⁵⁾。三番目に多かったのが「教員の英語力」(50.8%)で、この回答に関しては年齢別による差異は見られなかった。四番目が「英語の授業以外の場面での教員と生徒の関係性」(34.9%)で、この回答に関しては一番目、二番目に多かった回答とは逆に、教員の年齢が低くなればなるほど回答率が高くなり¹⁶⁾、一番若い30歳以下の教員(41.6%)と51歳以上の教員(28.9%)との間には大きな差異が見られた。五番目が「教員の姿勢」(29.9%)、六番目が「生徒の英語力のレベルを把握する力」(12.7%)と続く。以上の結果からわかるように、中学校の英語の先生たちが一番重視しているのは、どのように英語を教えたらよいか、どのように授業を行っていったらよいか、ということである。このことは「教科の指導力を高めるために、あなたはどのような内容の研修を受けたいと思いますか」という質問に対して、一番多かった回答が「具体的な指導法や教材研究などの実践的な研修」(60.8%)だったことにも裏付けられている¹⁷⁾。

ここで問題になるのは「教科指導力」(90.0%)や「授業を運営する力」(74.8%)が重視されているのに対して、「英語の授業以外の場面での教員と生徒の関係性」(34.9%)や「生徒の英語力のレベルを把握する力」(12.7%)が、教師たちからまったく重視されていないということである。確かに中学校になると小学校とは違い、各教科別の教員が授業を行う。従って各教員は担当の科目の授業を行えばよいのであって、生徒のことはそのクラス担任の先生に任せておけばよい、だから授業で教えている生徒でも、自分がクラス担任で受け持っている以外の生徒のことを心配する必要はない、という考え方もあるかもしれない。しかしはたして本当にそうだろうか。信州大学の酒井英樹准教授が指摘するように¹⁸⁾、「英語の先生が好きだから」というような教師と生徒の良好な関係が、生徒の英語の学習意欲を高める要因になるし、またその逆もあり得る。英語の教師として生徒から尊敬されるためには、まず一人の人間として尊敬されなければなら

ない。そのためには、「教科指導力」や「授業を運営する力」が必要であることは言うまでもないが、「英語の授業以外の場面での教員と生徒の関係性」も重要ではないだろうか。特に「英語の先生が好きだから」という生徒の回答率が非常に低かったことを考慮すれば、教師たちは生徒との人間関係をもっと重視する必要があるだろう。幸い基本調査によれば、若い教員ほど生徒との授業外での関係を重視しているという結果が出ている。今後もこの傾向が続くことを期待する。

「生徒の英語力のレベルを把握する力」が重要であるという回答が12.7%しかなかったということは、まったくの驚きである。「英語科の教師として、何が重要だと思いますか」という質問に対する8つの回答の中で、「その他」を除けば、「他教科と関連付けられる力」(1.6%)に次いで二番目に低い回答率だった。これは中学校の英語に限ったことではないが、先に述べたように具体的にどのように教えたらよいかという教科指導力や授業を運営する力は教師にとって不可欠である。しかし教師が授業を行う上で一番重要なことは、授業を聞いている生徒たちが、授業内容をどの程度理解しているかを把握することではないだろうか。授業は授業を行う教師と、それを聞く生徒とで成り立っている。重要なことは、いかに教師が教えるかということではなく、どれだけ生徒たちが理解できたか、ということである。先生の方がいくらかよく教えることができたとしても、それを聞いている生徒たちが理解できていないならば、まったく意味がない。教師が授業を行う上で一番いけないことは「これぐらいのことは、わかって当たり前」、「こんな簡単なことはわざわざ説明する必要はない」と思い、生徒が当然理解できることを前提に授業を行うことだと言われている。従って教師は、授業を聞いている生徒たちが授業内容をどれだけ理解しているかを常にチェックする必要がある。その意味において、英語の授業においては、授業を聞いている生徒たちがどの程度の英語力を持っているかを教師が把握することは極めて重要である。特に公立中学校の場合には生徒間の

英語力にはかなりの差があり、習熟度の高い生徒とそうでない生徒とを同じ授業で同時に教えなければならない。従って教師は、教えている生徒たちの英語力の格差にも配慮しなければならない。しかし基本調査の結果によれば、残念なことに生徒の英語の授業の理解度は極めて低い。しかも一部に授業内容を理解出来ない生徒がいる、というような状況ではなく、約6割の生徒が授業をあまり良く理解していないのである。つまり教師のほうが一方向的に授業を行っているが、肝心の授業を聞いている生徒たちは何をやっているのか、あまり良くわかっていない、ということである。この主要な原因は、生徒たちがどの程度の英語力を持っているのかを教師が理解していないことであると思われる。つまり生徒たちの英語力では理解できないことを教師が授業で教えようとしているのである。中学校の英語の教員が、中学生たちの英語の学力低下の実態を把握しているかどうかはなほ疑問である。調査の結果によれば、中学校の英語の教師の大部分が教科指導力が一番重要だと考えている。しかし生徒の英語力のレベルを把握して、生徒の英語の学力に即した授業を行うことが、英語の教科指導力の重要な要素であることに気がついている教員は、残念ながら少ないように思える。

結論

今回行われた「第一回中学校英語に関する基本調査【教員調査・生徒調査】」は、公立中学校における英語教育の実態を知る上で大変有意義であった。調査の結果浮かび上がってきたのは、理想とはかけ離れた中学校の英語教育の姿であった。

教育というものが効果を上げるためには、教える教員と授業を受ける生徒とが一体にならなければならない。しかし調査の結果によって、中学校

の英語の教員と生徒の間には深い溝があることがわかった。今回の基本調査の結果を一番知ってもらいたいのは英語の教員である。はたして中学校の英語の教師は、調査の結果明らかになった中学生たちの意識をどこまで理解しているのだろうか。東京外国語大学教授根岸雅史氏は基本調査報告書の中で、英語の教師は「『英語』が嫌いという生徒の発想がなかなか理解できないのではないか」¹⁹⁾と述べている。また生徒の英語の授業の理解度が低く、6割の生徒が英語が苦手な科目だと思っていることに関しては、「実は、この感覚も、『英語』の教師と共有されていないのではないか。教師の方は、生徒がそこまで理解できていないとは思っていないのである。6割といえば、教室の生徒の半分以上が『英語』はわからないと言っていることになるが、教師の方は『英語』につまずいている生徒はいるにはいるけれども、過半数がわからなくなっているとは思っていないだろう。」²⁰⁾と述べている。中学校の英語教育をより良いものにするためには、まず教師が教育現場の実態を正しく認識し、生徒の立場に立って物を考えることから始めなければならない。

基本調査の結果明らかになった問題とともに解決しなければならないのは、英語の学力低下の問題である。単に学力が一昔前に較べて低下したというだけでなく、今日の若者たちは、外国語の勉強のやり方自体がまったくわかっていない。今回の調査は、公立中学校の英語の授業が週3時間の時点で行われ、その後週3時間が週4時間に増やされた。しかし授業時間数が多くなっても、授業のやり方自体が以前と同じであれば、現状は改善しないであろう。問題を解決するためには、教師たちが何が原因なのかを解明し、より良い教育を行う努力をしなければならない。さもなければ、授業時間が増えたことによって、生徒たちの英語嫌い、苦手意識や教師に対する不信感がさらに増大し、教師と生徒との溝が以前にも増して深まる恐れさえある。より良い英語教育をめざすためには、まずこの溝を埋め、教師と生徒が信頼関係で結ばれなければならない。

かつての日本の英語教育は、役に立つ英語が身につかない、英語が話せるようにならないとして、きびしく批判され、その手法が根底から否定された。今日英語教育に対する世間の目は、以前にも増してきびしくなっている。日本の英語教育を改革するためにはまず、今回の基本調査で明らかになった中学校の英語教育の諸問題を解決しなければならない。中学校の3年間は、学校の英語教育において、もっとも重要な役割を果たすといっても過言ではない。その意味で、中学校の英語教育の向上なくして日本の英語教育の改革はあり得ない。今回の基本調査の結果を礎（いしずえ）にして、日本の英語教育を改革する第一歩を踏み出してもらいたい。

注

- 1) 研究情報, Vol.56「第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】」2009年12月4日, (株)ベネッセコーポレーション, p.25。
- 2) 「ほとんどわかっている」が14.7%, 「70%ぐらいわかっている」が25.9%, 「半分ぐらいわかっている」が32.8%, 「30%ぐらいわかっている」が17.1%, 「ほとんどわかっていない」が9.3%。
- 3) 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」, p.89
- 4) 「教職研究」2008年5月号, 教育開発研究所, p.43
- 5) 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」pp.59-60
- 6) Ibid. p.62. 引用中の(中略)は筆者による。
- 7) Ibid. pp.62-63
- 8) 基本調査報告書では、「あなたはどの教科が好きですか」という質問に対して、「英語」を選択しなかった場合を、わかりやすくするために「嫌い」と表記している。しかし英語を好きな科目として選択しなかったことと英語が「嫌い」ということは明らかに異なるので、本論文では「英語が嫌い」ではなく、「英語が好きではない」という表現を用いることにする。
- 9) この点に関して、同じ趣旨の質問を生徒たちにしたところ、「英語に限らず自分から進んで勉強する習慣がない」に対して「とてもあてはまる」が20.6%, 「まああてはまる」が33.1%, 「あまりあてはまらない」が33.8%, 「まったくあてはまらない」が11.8%, また「英語に限らず、勉強する気持ちがわからない」に対しては「とてもあてはまる」が16.3%, 「まああてはまる」が26.7%, 「あまりあてはまらない」が37.1%, 「まったくあてはまらない」が19.3%だった。両質問に対しては「あまりあてはまらない」の回答が一番多く、「とてもあてはまる」, 「まああてはまる」の回答

率は他の質問に較べて低かった。特に「英語に限らず、勉強する気持ちがわからない」に対しての「とてもあてはまる」「まああてはまる」の回答の合計（43.0%）は、全11の項目の中で最も低かった。中学生自身は、自分たちに学習の習慣がないこと、学習の意欲が低いことがそれほど大きな問題だとは考えていないようである。

- 10) 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」 p. 47
- 11) Supra p. 58参照
- 12) 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」 p. 54
- 13) 「英語を勉強しているのは、どうしてですか」という質問に対して「英語が好きだから」、「英語の勉強がおもしろいから」という回答は、「英語の先生が好きだから」、「英語の先生が励ましてくれるから」に次いで少ない回答で、両者とも「あまりあてはまらない」と「まったくあてはまらない」の合計が60%を超える高い数値だった。
- 14) 30歳以下の教員が87.0%，31～40歳が89.4%，41～50歳が90.5%，51歳以上が93.1%だった。
- 15) 30歳以下の教員が68.0%，31歳～40歳が73.8%，41歳～50歳が77.7%，51歳以上が77.0%だった。
- 16) 30歳以下の教員が41.6%，31歳～40歳が38.3%，41歳～50歳が30.9%，51歳以上が28.9%だった。
- 17) ちなみに、この質問に対して「自分自身の英語力を高める研修」という回答は17.4%にとどまった。中学校の英語の教員は、教科指導力、授業の運営方法に較べれば、自分自身の英語力はそれほど重要な要素とは考えていないようである。
- 18) Supra p. 67参照
- 19) 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書」 p. 25。引用中の『英語』は「科目としての英語」を表す。
- 20) Ibid. p. 25